

日時：平成19年12月13日（木）9：30～12：00

場所：浜松名鉄ホテル3階 『松の間』

出席者：辻本委員長、青木委員、萱場委員、笹原委員、佐藤委員、谷口委員、谷田委員、福濱委員、藤田委員（計9名）

1. 現状分析について

- ・佐久間ダムに堆積する土砂（特に礫分）の挙動について、佐久間ダムがなかった場合の分析が必要である。

2. 環境予測・評価について

- ・中流部区間の予測について、湛水区間、ダム直下、支川合流後を踏まえて区分することで、ダムによる影響を検証できる。
- ・下流部Ⅱ及び河口部の河床高の予測計算の初期条件や境界条件について、精査する必要がある。
- ・生態系の環境予測においては、湾曲部の砂州構造等の特徴的な場に注目することが必要である。
- ・水の濁り（SS）の予測については、排砂実施による影響を洪水毎に検討する必要がある。
- ・水の濁り（SS）に対する生物の影響を予測するにあたっては、佐久間ダムがなかった場合の濁りがどの程度かを把握し、その比較や濁りの絶対値がどの程度影響を及ぼすのか整理する必要がある。
- ・Step.1の予測評価においては、瀬や淵等の基本構造（ストラクチャー）が仮に形成されていても、表層粒度とその混合具合（テクスチャー）の変化は不明であるという認識が妥当である。
- ・Step.1で変化が生じると予測される事項については、Step.1での不確実な点を踏まえて、Step.2でさらに詳細に予測するというように一連のフローを整理する必要がある。

3. 今後の調査計画について

- ・ハビタットに関するモニタリング調査は、Step.1、2の予測で抽出された課題やそのハビタットの特徴を踏まえ、瀬・淵または複数の砂州等の適切なスケールで面的に調査範囲を設定する必要がある。
- ・モニタリング調査計画について、調査地点や調査数量等がわかるように図面等で明確にする必要がある。
- ・モニタリング調査項目は、研究レベルのものを仕分けする必要がある。
- ・置土実験は、目的を明確にして実施する必要がある。

4. 環境検討の枠組みについて

- ・Step.1、2の予測・評価とモニタリング調査計画の繋ぎ方を整理する必要がある。
- ・アセス（環境影響評価）は現状に対する事業による変化を比較するものであるが、現状に問題がある場合は対策を検討する必要がある。
- ・Step.1のアセス的な予測・評価をベースに、Step.2の流砂系の再生に特化した予測・評価を精査し、場合によっては対策を検討するという一連の仕組みを基に、予測・評価の精度向上及びモニタリング調査計画の具体化を図る必要がある。

5. 個別項目に係る指摘事項

- ・河床材料の粒度構成比率の予測結果から、ダム直下等の粗粒化が進行するかどうかについて確認する必要がある。
- ・河川横断形状の変化とダム・砂利採取との関係を分析することで、予測に繋げることができるか検討する。
- ・佐久間ダムの鉛直二次元モデルにおいて、堆砂の進行によるシルト・粘土分の捕捉率がどのように変化してきたかを確認しておく必要がある。
- ・河口域の現況調査結果（ナローマルチ等）についての分析を行うことで、河口域の土砂動態の予測及びその後の検証が可能である。
- ・夏場のアユの生息を考えた場合、洪水時から平常時に戻る一つの洪水の波形の中で、粒径の粗い土砂（数cm以上）がどのような挙動を示すかが重要な視点となる。
- ・魚類への影響を見るとき、高濃度の水の濁りによる急性的な影響も評価する必要がある。
- ・シラスの予測について、栄養塩は増えるかもしれないが、シラスに対する効果は知見が少なく不明であることがわかるように記載する必要がある。
- ・シナダレススメガヤの予測について、粒度の他に冠水頻度の変化等のパラメーターを加えて精度をあげる必要がある。
- ・排砂に伴うダム湖から下流への外来魚の分散について、検討する必要がある。
- ・栄養塩は一般的にシルト分などの細かい粒径の土粒子とともに供給されると考えられる。
- ・排砂実施によりシルト分は変わらず、砂分が増える予測結果となっているので、砂の供給増と栄養塩の動態について検討が必要である。
- ・底生動物の変化を捉えるには、継続した調査が必要である。
- ・置土実験においては、現象を素過程に分割し、各素過程を再現するような実験方法が考えられる。